

第10回国際シンポジウム

テーマ：「21世紀における政党政治」

日時：2016年12月10日（土）12：30～17：30

場所：東館6階 G-SEC Lab

後援：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター

使用言語：日本語、中国語（同時通訳）

【プログラム】

12：30～13：00 受付

13：00～13：10 開会の挨拶

高橋伸夫（慶應義塾大学東アジア研究所所長）

13：10～15：45 21世紀における政党の姿—イデオロギー、組織、政党システム

司会：高橋伸夫

報告：中北浩爾（一橋大学）

「変貌する自民党—その強さと弱さ」

鈴木 隆（愛知県立大学）

「中国共産党と比較政党研究の交錯」

中岡まり（常磐大学）

「党の主導する「公共性」の限界はどこか—「協商民主」から探る」

関 弘昌（国立台湾師範大学）

「台湾の政党政治」

討論：西川 賢（津田塾大学）

渡辺 剛（杏林大学）

15：45～16：00 コーヒーブレイク

16：00～17：20 ラウンドテーブル

Will Political Parties, including the Communist Party of China,
continue to be relevant in the 21st Century?

司会：加茂具樹（慶應義塾大学）

討論：中北浩爾

毛里和子（早稲田大学名誉教授）

関 弘昌

高橋伸夫

17：20～17：30 閉会の挨拶：加茂具樹

【概要】

本シンポジウムは現代中国研究センター設立10周年の節目にあたって開催された。2014年の第8回国際シンポジウムでは、権威主義体制の「強靱性」という視点から中国と北朝鮮の政治体制の比較を試みたが、今回は政党論の観点から中国と日本、台湾の比較、つまり権威主義と民主主義の枠を超えた試みを行った。

冒頭の挨拶で高橋所長からシンポジウムの趣旨が説明された。世界的に見て政党政治の流動期に入った今日、中国共産党をも枠内に取り入れた政党論の再構築が政治学にとって必要ではないかという重要な問題提起がなされた。第一セッションでは、日本の自民党の党執行部への集権化や「選挙プロフェッショナル政党」化、政党研究から見た中国共産党の特徴、同党が基層レベルを包摂する最新戦略である「協商民主」、台湾の政党システムの発展過程について、それぞれ報告された。政治体制の違いはさておき、政党が現在どのように黨員や民衆を動員し、凝集力を高めているのかが議論の中心となった。一方でラウンドテーブルでは、固有の特徴を有する中国共産党を既存の政党論で捉える限界などが議論の中心となった。その他、中国共産党の国家化の傾向、欧米において政党が担ってきた社会と国家をつなぐ媒介の役割の衰退、既存の理論に固執せず現実に沿って発想を転換させる必要性などが提起された。テーマが多岐にわたる議論となったが、新しい知見を発見するうえでたいへん有益な機会となった。